

# 全国草原再生ネットワーク ニュースレター

vol.62

Apr. 2025



高清水自然公園ひめさゆり群生地での山焼き（写真提供：南会津町南郷総合支所）

## 各地からの報告

### 高清水自然公園ひめさゆり群生地

(高倉 駿平：南会津町南郷総合支所)

#### 高清水自然公園ひめさゆり群生地について

福島県南会津町界地区の北東、昭和村との町村境に位置し、標高 918m の山の上にある古くからカリヤスの茅場として利用されてきた草原です。

また、環境省及び福島県のレッドリストで準絶滅危惧種に指定されているヒメサユリの国内最大級の自生地でもあり、ヒメサユリ以外にもヤマトキノウやキキョウ、ヤナギタンポポなど保護上重要な草原植物が多く自生する草原となっております。

現在もカリヤスの茅場として地域住民だけでなく、昭和村のからむし栽培でも利用されております。

また、毎年 6 月中旬から 7 月初旬に開園しているひめさゆり群生地は、6,000 人程の観光客が訪れる観光地となっており、生活と観光の側面から地域に根差した重要な資源として利用されております。

草原の地形がすり鉢状になっていることもあり、遠くまで広がる青空の中にヒメサユリが群生している様子は圧巻の一言です。

こうした風景を次世代につないでいくため、山焼きや電気柵設置などの保全活動を行っております。

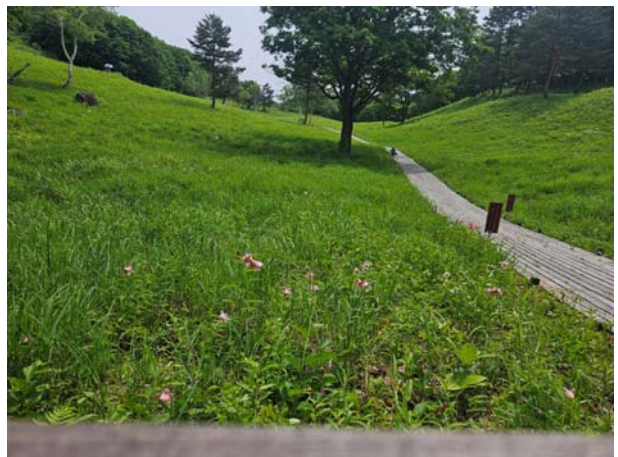
#### 選定について

今回、環境省及び福島県のレッドリストで指定されているヒメサユリの国内最大級の自生地であると同時に現在も利用されているカリヤスの茅場であること、行政だけでなく企業の協力を得ながら草原の保全に取り組んでいることなどが評価され、2024 年（令和 6）に未来に残したい草原の里 100 選に選ばれました。

選定されたことにより「この風景を次世代に残していかなければいけない」「ヒメサユリを今後も守っていく」という思いを管理に携わる全員で共有し、より思いを強くできたのではないかと感じているところです。



ヒメサユリ



園地の様子



フォトコンテスト ひめさゆり賞「梅雨の晴れ間 (1/2)」(岩崎勉氏撮影)



山焼きの様子

### 保護のための新たな取り組みについて

ヒメサユリの保護のため、山焼きや電気柵の設置、木道の敷設・修繕などを行ってきました。

しかし、近年、これまで対策してきたイノシシ以外にモグラやネズミ等による被害も見られるとの報告があり、令和 5 年（2023 年）から試験的に木酢液の忌避剤を利用した対策を講じております。

管理団体からは「これまでに比べてモグラの掘跡



山焼きの様子

が減少した。」との意見がありましたが、長期的な視点での効果検証が必要であるように感じております。

ヒメサユリは以前に比べて大きな個体が少なくなりましたが、今後も個体数の維持、増加に向けた保全活動に取り組んでいき、地域に密着した貴重な草原植物が共生するこの草原を次世代につなげられればと思います。

## 逢善寺茅場 — 文化財を支える茅の再生現場から

（高橋 栞：東京大学農学生命科学研究科博士課程）

茨城県稲敷市にある逢善寺（ほうぜんじ）は、826 年（天長 3 年、平安時代）に創建された寺院です。江戸時代後期に建造された書院・庫裏（くり）は、茨城県指定文化財に登録されており、重厚な茅葺き屋根が印象的な、伝統的仏閣建築の姿を今に伝える建築です。

この屋根には、霞ヶ浦周辺で採取される地域特有の茅「シマガヤ」が古くから用いられてきました。シマガヤは、主にカモノハシ（イネ科）を中心に、ヨシ、トダシバ、オギ、ヤマアワ、ウシノシッペイなど複数種が混ざった状態で利用される茅の総称です。一般的に茅として利用されるススキやヨシに比べ、シマガヤは草丈が低く、茎が細く繊細で、実際にシマガヤを用いて施工している茅葺き職人からは、繊細な質感の美しい仕上がりが高く評価されています。特にカモノハシは枯れると赤みを帯びるため「アカガヤ」とも呼ばれ、見た目の美しさと高い耐久性から、この地域で重宝されてきました。シマガヤは、国指定重要文化財である平井家住宅や、日本三名園の一つである偕楽園の好文亭の茅葺きにも用いられ

ています。

逢善寺庫裏の屋根をめくると、50 年以上前から使われてきた質の良い丈夫なシマガヤと、和釘で組まれた立派な梁が姿を現します。この伝統的な屋根を古くから支えてきたのが、逢善寺が所有する「逢善寺茅場」です。面積は約 7 ヘクタールであり、かつては茨城県や千葉県のカ文化財建造物や民家にシマガヤを供給していた重要な茅場の一つでした。しかし、



逢善寺庫裏



春に群落で咲くチョウジソウ

茅を刈る作業の手間や負担の大きさから、徐々に刈る人が減少した結果、植生が変わり、次第に茅として使える場所が減っていきました。

現在、茨城県内でシマガヤを採取できる茅場はわずか2か所のみとなっており、逢善寺の屋根はもちろん、この地域の文化財の葺き替えに必要な量を確保するのが難しい状況です。

シマガヤを絶やさず、持続的に利用できる場を少しでも増やしたい——そして、それを活かす文化を未来へつなげたいという茅葺き職人たちの強い思いから、2020年2月より再生に向けた火入れが始まりました。防火帯の設置や火入れ等の管理は、県内の茅場での経験と技術を持つ専門家チームとして茅葺き師、茨城県自然博物館、国立環境研究所、筑波大学の研究者らが参画しています。

火入れ以外にも、セイタカアワダチソウの抜き取りや樹木の伐採などが実施されており、かつてイネ科植物がほとんど確認できなくなった茅場にも、わずかながら回復の兆しが見られるようになってきました。これまでに確認された植物は50科166種に



火入れを手伝う子どもによる手づくり看板



初夏のノハナショウブ

のぼり、うち13種は茨城県の絶滅危惧種、7種は環境省の絶滅危惧種に指定されています（伊藤ほか2024）。

春にはノウルシ、チョウジソウ、ヒノキカサ、アリアケスミレ、夏にはノハナショウブ、クサレダマ、シムラニンジン、ノカラマツなど、湿性植物の花々が咲き始めました。また、シマガヤを構成するトダシバ、ウシノシッペイ、チゴザサの生育も確認されており、植生は着実に回復しています。

2025年2月には5度目の火入れが行われました。重要種であるカモノハシの確認には至っておらず、シマガヤとしての利用にはまだ時間を要しますが、火入れによる確かな効果が見え始めており、今後の継続的な管理が鍵を握ります。

逢善寺茅場は現在、専門的な知見を持つ少人数の



火入れの様子

体制のもとで、火入れの技術確立と茅場の再生に取り組んでいます。火入れ時には消防署・消防団との連携も不可欠であり、調整を重ねながら慎重に進められています。また、植物の多様性やシマガヤの回復状況についても、継続的に植生調査・記録が行われており、モニタリングに基づいた管理が実践されています。

この場所で進められている取り組みは、茅の技術の継承と、生態系の変化を踏まえた実践の場となっています。

#### 引用文献

伊藤彩乃・松木礼・川田清和・小幡和男・矢野徳也・西廣 淳 (2024) 茨城県稲敷市の茅場跡の湿生植物群落の植物相と種組成. 茨城県自然博物館研究報告 (27) : 25-38



植生調査の様子

## 「茅葺き文化伝承議員連盟 第6回総会」が開催されました

(上野 弥智代：日本茅葺き文化協会事務局長)

茅葺き文化伝承議員連盟は、地元で茅葺き、茅場がある議員を中心に構成されています。2024年9月19日(木)、衆議院第一議員会館会議室において、「茅葺き文化伝承議員連盟 第6回総会」が開催されました。主な議事の内容は以下のとおりです。

### 1. あいさつ、趣旨説明等

議連会長、事務局長からのあいさつがありました。

(1) 内は各議員の選出区または縁のある地域と茅場、茅葺き

○議連会長 山口俊一議員 (徳島：ふるさと文化財の森 京柱峠茅場 東祖谷茅葺き集落など)

これまでこの議連で議論を重ねる中で、残念ながらまだ国内に公共施設を茅葺きにした事例がない。ぜひ実現したい。

○議連事務局長 務台俊介議員 (長野：ふるさと文化財の森 小谷村牧の入茅場、白馬青鬼伝統的建造物群保存地区など)

### 2. 議事

(1) 国選定保存技術「茅葺き」の保存団体追加認定について [一般社団法人日本茅葺き文化協会] [文化庁]

○日本茅葺き文化協会 安藤邦廣代表理事：2024

年7月19日に文化審議会答申された。当協会は、「茅採取」に加えて「茅葺き」の選定保存技術の保存団体となる。この議連の皆様や関係省庁のご理解とご支援のおかげと感謝申し上げます。

当協会では、これからは「茅採取」「茅葺き」の一貫した研修事業、普及啓発事業を実施し、技能の継承と後継者の育成に一層努力をしていく。今後も茅葺き文化の地域性を尊重し、茅、茅葺きによる地域振興にも尽くしていきたい。

○文化庁：9月の官報の掲載をもって正式決定の予定。

○務台議員より文化庁へ：この認定による補助金の充実や後継者育成支援については、制限することなく実施してほしい。

(2) 2025大阪万博における茅葺きを活用したパビリオンの状況について [経済産業省]

パビリオン EARTH MART (小山薫堂プロデューサー) では、国内6地域から集めた茅を使い、茅葺き職人らが屋根を葺く。延べ床面積約1,495m<sup>2</sup>。

茅は、かつて里山の暮らしにあった営みの循環の象徴。茅は万博終了後にアップサイクルの予定。

外観は日本古来の茅葺き屋根の家が集まる集落をイメージ。(設計：隈研吾建築設計事務所)

### 〔3〕大嘗祭の総括報告について〔宮内庁〕

今回の大嘗宮造営については、簡素化が求められ、施工性、建設コストなどの観点から、主要三殿を茅葺きから同じ自然素材を用いた板葺きに変更して造営した。このことについて本議員連盟や各方面から厳しい指摘を受けている。今次の大嘗宮設営については、単に前例とせず、皇室の伝統の継承に当たり、広く国民の理解を得られるように努めたい。

○山口会長：決して納得はしていない。決して前例としないこと。

○神社本庁：今回は正殿が板葺きになったばかりか、正殿に準ずる大切な建物である膳屋(かしわや)は、ビニールテントになっている。それらの大切さを再認識することが必要。

○茅文協安藤：茅は単なる自然素材ではない。茅はイネ科の多年草。茅葺きは豊草原瑞穂の象徴。自然素材であっても、板ではまったく意味が異なる。伊勢神宮が茅葺きであるように、大嘗宮は茅葺きでなければならない。

茅で葺くことを基本とし、その上でコストの削減や工期の短縮などの課題については、技術的に工夫できる。当会では茅の採取や職人の手配などについても、次回に向けて十分な準備を整える体制を整備していく。そのための情報提供と情報共有を宮内庁としっかりはかっていきたい。

### 〔4〕茅葺き文化と草原の再生について〔一般社団法人全国草原再生ネットワーク〕

かつて国土の30%におよんでいた草原は、現在は1%に激減している。しかし茅場を含む草原の多面的価値は見直されつつある。

1) 水源涵養機能：雨水の遮断や水の消費量が少ない草原・茅場は、水源涵養機能が一般に森林より高い。

2) 炭素の固定：草原・茅場は森林と同じように大量の炭素を吸収する。燃えたり腐っても、また草が生えてくるので、地上部の炭素は±ゼロ、ニュートラルである。さらに草原・茅場は土壌中に大量の炭素を固定し、その蓄積量はスギ植林地を上回る。草原の長い歴史が続いた結果がいわゆる「黒ボク土」である。

3) 生物多様性の維持：草原性の動植物が絶滅の危機にある。生物多様性の維持のためには、草原の保全が必要。

4) 減災機能：森林（特に手入れをされていない植



総会の様子

林地)に比べると、草原は土砂崩落の危険性が小さく、減災機能がある。

草原再生ネットワークでは、草原サミット・シンポジウムの開催、未来に残したい草原の里100選の選定事業を通じて、草原を次世代につなぐ取り組みをおこなっている。

○環境省：生態系サービスの見える化、データ蓄積を行なっている。国立公園は人の手を入れて利用を促進しようとしているが、まだ整備できていない。自然共生サイトとして、身近な自然の認定を行なっている。

○茅文協：草原は「守る」という点で語られるが、活用つまり「刈る」ことが必要。刈ったり火入れをしなければ草原は森林に遷移する。使うことではじめて草原は維持される。草は大切な資源であり、屋根に葺かれて、そこに炭素も固定される。その古茅は農地に施されて、有機土壌として、炭素を土中に蓄える。この循環を取り戻すことが大切。

茅葺きと草原・茅場は一對のものである。現状はバラバラでそれぞれが危機的状況。ぜひこの茅葺き文化伝承議員連盟でも、草原と茅葺きを一体の文化ととらえて、今後この運動をそのかたちで進めていただきたい。

○林野庁：森林、木材利用については国交省と連携するなどしているが、茅場、すなわち原野をどうするのか、支援の手段がないのが現状。

○務台議員：林野庁の「野」は本来草原ではないか。所管ととらえて取り組んでいただきたい。茅葺き文化伝承には、茅場・草原も含んでこれまで取り組んできた。しかし、名称にもわかりやすく見える化していきたい。

(5) 現地視察候補地について

議連で茅場、茅葺き、職人がそろった地域の視察をしたい。文化庁、林野庁が候補地をあげているので、議連で検討し、茅文協に案内など願います。

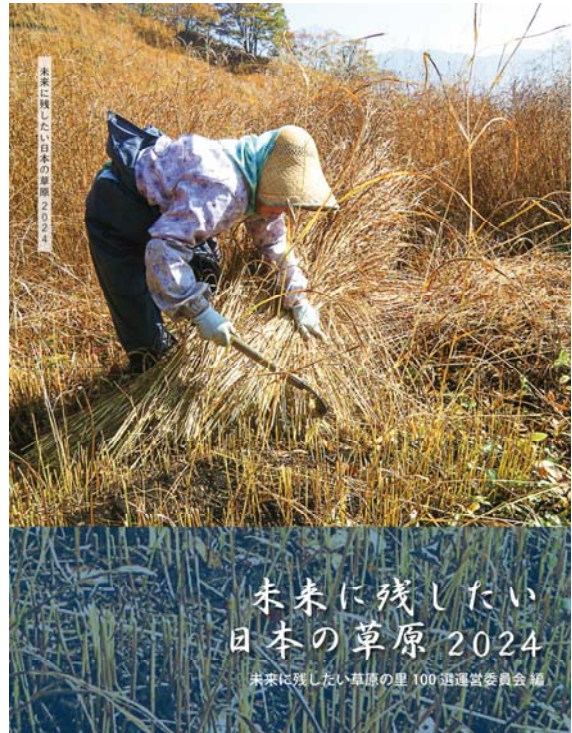
最後に、務台議員より、有意義な議論ができた。茅葺き文化伝承基本法の議員立法については、今後実現に向けて進めていく。関係省庁、関係者には今後とも協力をお願いしたい。

書籍「未来に残したい草原 2024」が発刊されました

「未来に残したい草原の里 100 選」に 2024 年に選定された草原を紹介するための書籍が発刊されました。発刊のためのクラウドファンディングにご協力下さったみなさまにはお礼申し上げます。

本書籍には、2024 年に選定された草原の里の紹介のほか、選考委員である養老孟司氏のインタビュー、火入れの安全性やあか牛についての紹介など、さまざまな記事も載っています。

一般向けの販売も行っていますので、ぜひお求めください。



未来に残したい日本の草原 2024 目次

巻頭エッセイ

茅場の時間—人と自然が作った風景— (井田秀行)

未来に残したい日本の草原 2024 年選定地

高清水自然公園ひめさゆり群生地 (福島県南会津町)

山中湖村明神山の草原 (山梨県山中湖村)

小谷の茅場 (長野県小谷村)

田浪地区採草地 (岡山県新庄村)

くじゅう坊ガツル湿原 (大分県竹田市)

記事

「野焼き」の未来を考える (増井太樹)

あか牛と阿蘇の草原 (高橋佳孝・高橋博人・横川洋)

火入れ作業の安全確保と心がけ (高橋佳孝・鷺津大輔)

草原の里 100 選が語る「日本の草原の今」(島村史孝)

「第 1 回草原サミット」誕生の背景と今後への期待 (山田朝夫 (インタビュー))

昆虫の眼から見る日本の草原 (養老孟司 (インタビュー))

「未来に残したい草原の里 100 選」事業の紹介

## 草原をめぐる動き (2025年4月～2025年7月)

- 4/2 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- 4/5 自然観察交流会 (兼) ヤマアカガエル産卵調査 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 4/12 千町原保全活動 (場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/13 寒風山山焼き (場所: 秋田県男鹿市、連絡先: 男鹿市観光課)
- 4/13 深入山の山焼き (広島県安芸太田町、連絡先: 安芸太田町産業観光課)
- 4/19 雲月山の山焼き (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/20 霧ヶ谷作業地の春季作業 (場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/26-27 「森林塾青水 20 周年」上ノ原茅場の野焼きと未来を語る 2 日間 (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 4 月下旬～5 月上旬 小清水原生花園火入れ(野焼き) (場所: 北海道小清水町、連絡先: 小清水原生花園風景回復対策協議会・小清水町産業課商工観光係)
- 5/6 自然観察会「サクラソウと蒜山の春」(場所: 岡山県真庭市、連絡先: 津黒いきものふれあいの里)
- 5 月上旬 藤生鉢山の山焼き (場所: 福島県南会津町)
- 5 月上旬 山焼き後の雲月山植物観察 (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 5 月上旬 サクラソウのモニタリング (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 5/11 乙女高原の遊歩道づくり (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 5/25 湿地の希少植物を観察しよう (場所: 茨城県坂東市、連絡先: ミュージアムパーク茨城県自然博物館)
- 5/25 乙女高原案内人養成講座 (6/8,7/27、場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 6/14 夏の草原保全 花咲く草原の夏草刈り (場所: 岡山県真庭市、連絡先: 津黒いきものふれあいの里)
- 6/29 マルハナバチ調べ隊 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 6/29 津黒高原湿原で生き物観察 (場所: 岡山県真庭市、連絡先: 津黒いきものふれあいの里)
- 6 月下旬 千町原の植物観察 (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 7/19 夏のボランティアガイド① (7/20,26,27、場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 7/19 夏休み前の遊歩道の草刈り (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 7/20 乙女高原のチョウ研修会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

### 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 62 2025年4月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局  
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14  
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】春になり、各地で火入れや山焼きなどが行われています。事務局のある島根県大田市三瓶山でも3月下旬に火入れが行われました。昨年は悪天候で実施できなかつたため、2年ぶりの山焼きとなりました。事故などなく無事に終わり、一段落、といった感じです。